

16. 瀬越町の食生活

小笠原 道子

I はじめに

II 食材について

III 台所について

IV 献立と調理

V おわりに

I はじめに
瀬越町の食生活を、食材について、台所について、献立と調理、の3つに分けて、その移り変わりをみていき、そこから、全体としての生活のあり方を考えていきたいと思う。また、基本的には、1920年頃から現在までをおっていききたいと思う。これは、本稿が聞き取りに基づいており、被調査者の年齢から、記憶をたどるには1920年頃が限界であったためである。

II 食 材 に つ い て

1. 水について

瀬越に市の水道が敷設されたのは1994年のことである。ここでは、1994年という年の前後に分けてみていく。

① 1920年～1994年

瀬越では使用されてきたのは地下水である。井戸の変遷をみると、滑車もなく手で桶を引き上げる井戸、つるべの井戸、手押しポンプの井戸、モーターの井戸、と変わってきた。瀬越は砂地であるので、井戸を掘るとき深く掘らないと水がでない。井戸を掘るには経費がかかるため、1つの井戸を何軒かで共有していた。1910年以前は、戸数が200ぐらいであったのに対し、井戸は10ほどしかなかったという。天秤棒を担いで水を汲みにいったということだ。各家が井戸をもつようになったのは1940年頃だった。井戸が屋内にある家と屋外にある家があった。

1948年の福井地震の時に井戸も被害を受け、壁が歪んだり、砂が入ったり、水の色が変わったりした。その時、新たにモーターの井戸をつくり、それまで使用されていた井戸は使われなくなったり、修理しても主としては使われなくなった。1955年頃には、どの家でもモーターの井戸を使うようになっていた。モーターの井戸、といっても2種類ある。1つは、井戸を掘って、その井戸の水をモーターで汲み上げるものであり、もう1つは、パイプを水の層までうちこんで水を汲み上げるものである。

② 1994年～現在

瀬越に市の水道が敷設されたのは1994年のことだ。これは加賀市で最後であった。瀬越の地下水は上質であるのだが、火災時に消火用に使用するため、という理由で敷設された。現在、消火栓はすべて市の水道である。生活用水としては、市の水道が整備されてからも地下水を使用している、という人がほとんどである。市の水道に関していえば、瀬越の全世帯にメーターは取り付けられているのだが、実際に使用しているのは5、6軒で、それ以外の家は休止している。

瀬越の水の使用量のおよそ95%が地下水である。その理由は「地下水のほうがおいしいから」、「夏は冷たく、冬は温かいから」、「市の水道はお金がかかるから」といものであった。市の水道と地下水を併用している人も「市の水道は基本料金の分だけ使う」、「市の水道は、洗濯、洗車、庭や畑の水やりに使う」という。また、調査した中では、市の水道を主に使用し、地下水は庭や畑の水やりに使うという家も2軒あった。その理由は「地下水は赤く濁っているから」、「庭にまいた除草剤の影響が心配だから」というものであった。しかし、これは少数派であり、実際、瀬越の地下水は水質検査においても上質であることが証明されているという。これから先も、地下水がなんらかの事情で使用できなくならないかぎり、瀬越の人たちは、地下水を生活用水として使用し続けるだろう。

2. 食材の調達について

食材の調達において大きな転換点となったのが、第2次世界大戦と高度経済成長期だったので、ここでは、第2次世界大戦前（1920年～1940年）、戦中、戦後、（1940年～1955年）、高度経済成長期から現在まで（1955年～現在）の3つに分けてみていく。

① 1920年～1940年

瀬越では、農業で生計をたてている人は少なかった。それは、瀬越が砂地であり、農作物の栽培には不向きだということ、働き手となる人たちが出稼ぎで村を離れ、農業の担い手がいなかったこと、出稼ぎ者の仕送りがあるため、農業収入がなくても十分生活していけたことなどがその理由として考えられる。女性、老人など家に残っていた人たちで自家消費用の野菜や米を作っている程度であった。瀬越の人たちの間では、若い人は外で働き、年寄りや田畑で働く、という考え方があったそうだ。江沼潟の浅瀬で田を作っていた。1930年頃に江沼潟が砂で埋められて現在の田になる前には、江沼潟は北潟湖とつながっていた。浅瀬と入っても、腰の辺りまで水に浸かったという。こういった田を「フカダンボ」と呼んでいた。「ショショブネ」で稲を運び、人が歩くところに板を敷いて歩きやすくしていた。また、稲が流されないように土を盛って植えた。だから、土地当たりの収穫高はかなり低かった。また、スイカやウリやトマトなど、自分の家でつくっていない野菜は、柴山から売りにきたものを買ったり、瀬越のなかにある店で買ったりした。瀬越には、戦前には、食料品店や雑貨店のようなものが6、7軒あったという。しかし、1970年代にはほとんどなくなり、1980年代には1軒もなくなってしまった。

魚は、塩屋や橋立から売りに来たものを買った。「北潟まで行ってふなを釣ってきた」(80歳代男性) こともあったという。また、北海道から海産物が送られてきたという。瀬越には北海道に親戚がいる人が多い。その親戚たちが、乾物を送ってきてくれていたのだ。おじいさんが北海道にいたというある家(60歳代女性)では、鯨をかますいっぱいにつめたもの、昆布をむしろにたくさんまいたもの、大きな貝柱をわらで縛って干したもの、そして正月には新巻鮭などが送られてきたという。(新巻鮭は、つい2、3年前まで送られてきていたそうだ。) こうして、乾物がたくさん手に入ったので、食材として用いる頻度も高かったようだ。

② 1940年～1955年

あまり農業が盛んでなかった瀬越においても、第2次世界大戦中、そして戦後の食料難の時には約50軒が米をつくっていた。戦後間もない頃は「半だし」といって、田でできた米を半分提出する義務があったという。また、作れるところにはどこにでも畑を作って、薩摩芋やジャガ芋を植えた。現在の運動場も、川の側も畑であった。山も木を伐り開墾した。川の側の畑は増水すると流されてしまうし、開墾した山の土地も木を伐ったために雨が降ると流されてしまった。それでも、少しでも食糧ができればと何度も作りなおした。

調味料は、というと、砂糖や塩は配給制でほとんどなかった。砂糖に代わる甘味料として、砂糖黍を絞り、たいて飴にしたものを使った。「変わった味がして、あまり好きではなかった」(60歳代女性) という人もいた。また、塩を自分の家で作るという家が結構あった。海水ににがりを入れ、鉄板でたき、塩をつくった。海水は荷車をひいて塩屋まで汲みにいった。瀬越と塩屋の間を何度も往復しなければならなかった。たる4、5杯の海水から1升ぐらいの塩しかできなかったという。そうしてできた塩は近所の人に分けてあげたそうだ。また、海水をそのまま調味料として使っていた。1升びんを持って塩屋まで海水を汲みにいった。海水は少々苦みがあったという。1948年の福井地震の時も、海水を調味料として使っていたそうだ。

買い物をするのは、瀬越のなかにある店や、大聖寺、塩屋、吉崎の店であった。その際の交通手段は、徒歩、自転車、船であった。この船というのは、「巡行船」といって大聖寺川を通り、大聖寺と吉崎、塩屋を結ぶ定期船である。吉崎御坊に詣る人たちがよく利用した。しかし、1947年に、瀬越の辺りで船が転覆し、多くの死傷者をだして以来、巡航船は廃止されてしまった。この船が廃止された頃は、バスが登場したり、自転車を使用したりするようになり、交通の便がよくなった頃でもあった。

③ 1955年～現在

戦中、戦後に農業をはじめた家が多かったのだが、経済が飛躍的に成長し、第2次・第3次産業が発展して賃金労働者が増加する一方、農業は衰退した。減反政策は農業離れにさらに追い打ちをかけた。瀬越の人が所有する田は葦原になってしまった。1996年現在、米をつくっているのは1軒だけであり、農業で生計をたてているのはその家だけである。しかし、その家も兼業農家で

あり、専業農家は1軒もない。畑で、自家消費用の野菜をつくっている家は15、6軒ある。大根、ニンジン、ハクサイ、カブ、ホウレンソウ、キュウリ、ナス、トマト、イモなど季節の野菜をつくっている。土地を借りて畑をつくっている家もある。ほとんどの家では、お年寄りが畑の世話をしている。土地が砂地であるので、夏には日に何度も水やりをしなければならないという。

畑がある、といっても、瀬越では食料品はほとんど購入している。1970年頃までは食料品店があり、1985年頃までは米屋があったのだが、現在、瀬越には店は1軒もない。たいていの人は大聖寺の大型スーパーや塩屋の食料品店や移動販売を利用している。そして、まとめ買いをするという人が目立った。1週間分ぐらいまとめて買うという人が数人いた。その理由は「大聖寺まで行くには交通の便が悪いから」である。買物は、家族の中で車を持っている人がするという。瀬越の車の保有率は高い。「車をもたないとどこにもいけない、何もできない」という声が多かった。また、車を持っていないお年寄りの中には、バスやタクシーで大聖寺まで買物にいく人や、塩屋まで歩いて買物にいく人もいる。生活していくうえでもっともたいへんなことが買物だという人もいる。「バスを利用するが、バスの本数は少ないし、バス停が遠いので、重いものを買うことができない」(70歳代女性)という。瀬越の人たちは誰もが買物するのはたいへんだと思っているようだ。

移動販売で、頻繁に品物を持ってきてくれるのは生協、塩屋と橋立と大聖寺の魚屋、また、牛乳、乳酸飲料の配達の人である。生協は毎週木曜日にくる。冷凍食品、卵、牛乳などを買うという。弁当用のものを購入するという人(50歳代女性)がいた。10年ほど前から生協を利用するグループがあった。現在は2つのグループがある。どちらも8人ぐらいのグループである。また、塩屋の魚屋のおばあさんは、朝6時ぐらいにリヤカーで売りにくる。「ちょうど朝食の時間なので朝食用によく利用する」(50歳代女性)という。浜茶屋をしているので夏はこない。橋立の魚屋は、たいてい火・木曜日に車で魚を売りにくる。また、牛乳配達と乳酸飲料の配達が1日おきに大聖寺からやってくる。また、1996年6月まで、大聖寺のK商店が毎週火・金曜日に食料品を車で売りにきていたが、大聖寺に次々とできる大型スーパーの影響でこなくなってしまったという。野菜や菓子、頼めば味噌や粕、酢などを持ってきてくれたそうだ。瀬越において、移動販売や宅配の利用者は他の地域に比べて多いように思われる。これは、海に近いこともあり、昔から魚屋が新鮮でやすい魚を売りに来ているので、そういったものが定着していること、商品の質が高いこと、そして、老人が多いこと、交通の便が悪いことが原因のように思われる。

Ⅲ 台 所 に つ い て

ライフスタイルの変化やエネルギーの変化などによって台所の様子は変化してきた。現在の生活スタイルに近づいてきたのは、1950年代後半から1960年代であった。1950年代半ば頃から耐久消費財が普及しはじめる。モーターの井戸、「三種の神器」と呼ばれた電気掃除機、冷蔵庫、洗

濯機が一般家庭に普及した。

1. 家の構造と台所

流しは井戸の側にあり、石造りで、畳2枚分ほどの大きなもので、下にあり膝をついて使うようなものであった。風呂がなかった頃、夏には流しにたらいを置いて行水をした。現在使っているような立って使う流しになったのは1960年頃であった。

1950年代半ば頃まで、煮炊きをするのに用いたのは「ヒツイサン」であった。これはかまどのことである。燃料となるのは松林で集めてきた「コッサ」である。コッサとは松葉のことだ。コッサは早いもの勝ちで、良いものを手に入れるには早く行ってなわばりを宣言せねばならなかった。

1948年頃に石油コンロを使うようになった。これは空気を圧縮しガスにして使うものである。石油コンロを使うようになる前に、電熱器を使っていた家庭もあった。これは、裕福な家庭で使われていたもので、渦巻き状のコイルであった。電気の開設は昭和初期であったが、はじめは1軒1灯で、コードを長くして、いくつもの部屋に移動できるようにしておいた。夜になるとひとりでに電気がついた。電気が充足するようになったのは1940年頃だった。そして、1960年頃にプロパンガスのガスコンロを使うようになった。

現在瀬越においてよく利用される燃料は、ガス、灯油、電気である。そのうち、炊事に利用するのは主にガスである。

2. 台所の備品

1950年代半ば頃まで、ご飯は「ヒツイサン」で炊いていた。そして、炊いたご飯はおひつに入れて保存した。そのおひつを、冬には綿を入れた布団のようなもので包み、こたつに入れて保存した。夏には、ござをしいてかごに入れてつるしてあった。また、おひつに限らず、薩摩芋のゆでたものなど、何でもかごにつっておいたそうだ。それは猫に食べられないようにするためだったかもしれない、という話だ。

「オゼン」でご飯を食べていた。「オゼン」とは、あしを折ってたたむことのできるちゃぶ台のことである。また、食器は使ったあといちいち洗わずに箸は箸箱に入れ、棚にしまっておき、1日1回晩ご飯のあとに洗っていた。これは水汲みがたいへんだったためである。

また、裕福な家庭には、昭和初期に氷の冷蔵庫があった。瀬越の一般家庭では、1950年代後半に電気冷蔵庫が普及するまでは、冷蔵庫そのものがない家が多かった。長期保存するほど食料もなかったもので、棚に置いていたという。スイカなどを冷やすときには井戸で冷やしたという。

1950年代半ば頃に電気炊飯器を購入する家がでてきた。ある家では、買うことは買ったが、「使うのはもったいないし、コッサで炊いたご飯の方がおいしい」と家族にいわれて、購入後もかなりの間コッサでご飯を炊いていたという（60歳代女性）。「コッサで炊いたご飯はおいしかった」という人は多かった。

1950年代半ば頃から電化製品が普及しはじめた。その購入順序は、洗濯機、掃除機、テレビ、冷蔵庫という順序だった。そして、電化製品のような耐久消費財の購入において、商品に関しての情報が少なかったため、近所の家で買ったものを参考にしたという。

また、1965年頃にはテーブルとイスで食事をするようになった家が多い。

IV 献立と調理

ここでは、第2次世界大戦前（1920年～1940年）、戦中、戦後、高度経済成長期まで（1940年～1955年）、高度経済成長期～現在まで（1955年～現在）の3つに分けてみていく。

① 1920年～1940年

朝食は、ご飯とお汁と漬物であった。朝のご飯は、前の日に炊いた残りの冷やご飯であった。これは、温かいご飯だと余計に食べてしまうので、あまり食べないようにするためだという。昼食は野菜を炊いたものや、魚を焼いたり炊いたりしたものであった。夕食は、ご飯、お汁、煮物、魚であった。夕食にはかならず魚を食べていたという。その魚は鰯など塩屋から売りに来たものや、塩鮭や鯿など北海道から送られてきたものであった。IIでふれたように、瀬越の多くの家庭では、北海道から送られてくる乾物などを食事によく用いた。たとえば、「ミガキニシン」（乾燥鯿のこと）は、おって、たたいて、醤油をかけて食べた。また、米については、「新米を食べると米が減る、なるべく古米を食べるように」と古米を食べるようにしていたという。「古米を食べる家は裕福な家」といわれていた。米は古いものから食べるので、古米を食べるということは、余っている米があるということであるからである。また、1940年頃に三谷から嫁にきたという人（70歳代女性）は、普通の何でもない日に、姑が揚げをたいていたことに驚いたという。というのは、揚げはぜいたく品で、三谷ではめったに食べることはできなかったのだ。

子どもたちのおやつには、北海道から送られてきた乾物がよく利用された。鯿や昆布やスルメを焼いて食べたという。乾物以外によく食べていたおやつは、カキモチ、ジャガ芋、薩摩芋、アラレ、コメハゼなどだった。ほかには、ハッカ飴、ニッキ飴、キャラメル、砂糖のついた動物ビスケット、「ケンケラ」、「クロンボ」、「ボウトチン」などもあった。遠足のときには、カルミンやチョコレートなどをもっていったという。「ケンケラ」とは、豆の粉でつくった菓子である。「クロンボ」とは、こめはぜのようなものを黒砂糖で固めてねじったものだ。形がそっくりなことから「ネコノクソ」と呼ぶ人もいた。「ボウトチン」とは、砂糖をまぶした豆菓子である。「ケンケラ」も「クロンボ」も吉崎の名物であり、4月23日～5月2日の蓮如忌には露店で売っていた。また、四大節（四方拝、紀元節、天長寿、明治節）には、1931年頃まで学校で紅白饅頭を配っていた。子どもたちはそれをとても楽しみにしていたという。

② 1940年～1955年

戦中、戦後の食糧難の時代には、食べることができるだけで良かったという。中には、家で田

畑をつくっていたので食べるものにはそんなに困らなかった、という人もいた。しかし、たいいてい人は、お腹が膨れればそれでいいと思っていたようだ。食べることでできるものは何でも食べた。できの悪い米を粉にして、団子にしてお汁に入れたもの、ジャガ芋をすりおろして鉄板で焼いたもの、米よりも芋や麦の方が多い、イモご飯や麦ご飯などを食べた。これはいいほうであり、アワやキビ、芋のつる、ほとんど水のようなうすい粥などを食べていた。調味料も配給制でほとんどなく、Ⅱで述べたように、調味料は自分でつくって味付けしていた。

③ 1955年～現在

献立を尋ねると「ほかの所と一緒」、「どこでも同じでしょう」という答えばかりが返ってきた。献立は、全国どこでも一様に同じになってきている。そのような中、特徴的な魚の調理法があった。「ハマイリ」という方法である。これは、塩だけで魚をゆでるというものである。小さなカレイ、メギスなどをよく用いるという。魚が新鮮なので甘味があり、それだけでおいしい料理になるという。ハマイリ以外でも、魚を煮るときは醤油だけ、というように、瀬越の人たちは魚にはとてもシンプルな味付けをする。これは新鮮な魚が手に入るからなのだろう。また、瀬越の人たちは、肉よりも魚を食べることが多い。

V お わ り に

これまでみてきたように、瀬越において食生活が大きく変化したポイントが2つある。それは、第2次世界大戦と、高度経済成長である。食生活において、瀬越の特徴があらわれていたのは第2次世界大戦前である。第2次世界大戦まで、米や魚を毎日食べていたり、魚や野菜を購入したり、子どもにおやつを購入して与えたりと瀬越は豊かな食生活を送っていた。北前船で強いつながりをもった北海道の影響を受けていた。また、女性は家庭の外で働くべきでないと考えられ、自分の家で畑をつくったり、家事をしたりする専業主婦が多かった。

戦中・戦後は瀬越のみならず、全国的に食糧難の時期で、あまり農業の盛んでない瀬越においても積極的に農業が行なわれた。何もかもが自給自足の時期だった。また、瀬越では、戦後、女性が生活のために勤めにではじめた。その後、1955年頃から生活が豊かになり、電化製品の普及などによって家事の負担がかなり減った。また、第2次・第3次産業の発展と反比例するように、第1次産業である農業が衰退した。

現在は、盛んに女性の社会進出が行なわれるようになり、夫婦共稼ぎの世帯が大半をしめる。そうすると、女性の家事の負担を軽減せざるをえなくなり、様々なより便利なものが登場してきた。「今は、インスタント食品や冷凍食品などがたくさんあるから、楽だ」という声が多くきかれた。また、交通網の発達、大量生産・大量消費の世の中になり、全国どこでも同じようなものが安く手に入るようになった。また、様々な情報を新聞、テレビ、雑誌から入手できる。こうして、食生活が「ほかの所と同じ」になってきた。地域の独自性というものがほとんど失われている。こ

れからも、ますます食生活は全国の均一化が進んでいくだろう。また、瀬越の環境も変わっていくだろう。その中で、瀬越の生活スタイルはどのように変化していくのだろうか。おそらく、瀬越も例にもれず、均一化が進んでいくだろう。